

Q 式年遷宮はなぜ20年に1度なの？

A 遷宮がなぜ20年に1度行われるのかについては、定説はありません。地面に直接御柱を立てることや屋根が萱葺であることによる耐用年数等、色々な説があります。御造営と平行して、御装束や神宝も古例に従って調製されます。御装束とは、正殿の内外を奉飾する御料の総称で、525種、1,085点を数えます。また、神宝とは調度の品々で、189種、491点あります。これらの調製は、御造営とともに伝統工芸の優れた技術を守り伝えるという重要な意味があります。

式年遷宮は、伊勢神宮が「常若(いつまでもわか
わかしいこと)」<出典：広辞苑(こうじえん)>を保ち続け、永遠性を実現する大いなる営みでもあるのです。

出雲大社の遷宮は、およそ60年に1度

出雲大社(島根県)の遷宮は、およそ60年に1度です。今年、出雲大社の「平成の大遷宮」の年にもあたり、1953(昭和28)年以来60年ぶりに、同じ年に遷宮を迎えました。

もっどわしく知ろう 伊勢神宮鎮座の歴史

「日本書紀」によると、約2000年前、第11代垂仁天皇の第四皇女である倭姫命は、永遠の鎮座地を求める旅の末、伊勢国の五十鈴川のほとりにたどり着かれたと言われていました。その際、天照大御神から「伊勢は新鮮な海の幸・山の幸に恵まれた美しい理想の国です。私はここに居たいと思います。」とのご神託を受け、現在の皇大神宮〔内宮〕がある地に祀られることになりました。

その約500年後、天照大御神が雄略天皇の夢枕で、「食材に恵まれた地には、私のそばで、食のお世話をする神様の豊受大御神を丹波の国(現在の京都府中部、兵庫県北東部、大阪府北部)から迎えてほしい。」とのお告げをされ、豊受大御神が食を司る神として呼ばれたと言われていました。以来、豊受大神宮〔外宮〕では、朝夕二度、天照大御神にお供えするお食事をお供えする「白別朝夕大御饗祭」という祭りが続けられています。

(三重県観光キャンペーン関係資料より)

御用材は繰り返し使用されます。

式年遷宮では、1万本余りの御用材が使用されます。しかし、使用された御用材は、捨てることなく繰り返し使用されます。

式年遷宮に
みるエコ

例えば、外宮旧正殿の棟持柱は宇治橋外側の鳥居として使われ、さらに20年後は、桑名市の七里の渡跡にある「一の鳥居」に移築されます。

このように式年遷宮では、限られた資源が有効に活用されており、ここにリサイクルを基本とする循環型システムを学ぶことができます。

ひとくちメモ

七里の渡は伊勢国の東入り口にあたるため、天明年間(1781~1789)に伊勢神宮の「一の鳥居」が建てられ、伊勢神宮の式年遷宮ごとに建て替えられています。



一の鳥居

(教材「三重の文化」P4より)

前回の式年遷宮では木曾のヒノキを100%使用していましたが、平成25年の遷宮の御用材は、その約25%が神宮の宮域林からのものを使用します。神宮では、将来の式年遷宮のため、計画的に宮域林の造林事業を進めており、今回その宮域材がはじめて使用されます。

また、前回の式年遷宮では、平成5年の北海道南西沖地震で被害を受けた奥尻島の言代主神社に、別宮・月讀宮の古材一式が移築されたほか、全国169の神社に古材が譲り渡されました。平成7年の阪神大震災で被害を受けた生田神社もそのひとつ。地震や自然災害などで被害を受けた全国の神社で、神宮の資源が活用されています。



内宮・外宮の御正殿
御木曳行事で運ばれたヒノキは、神宮・御正殿などの社殿に使われます。

(三重県観光キャンペーン関係資料より)